

シリーズ 「発達に違いのある子どもたち」

市では、「障がいのある人、ない人にかかわらず だれもがいきいきと安心して暮らせるまちづくり」を基本理念としてさまざまな施策に取り組んでいます。

今回も、市内で子どもの発達支援に取り組んでいるNPO法人「まいすてっぷ」から、発達に違いのある子どもたちについて市民の皆さんに正しく理解してもらうために、文章を寄稿していただきました。

「幼児期のことば」

お子さんの発達に遅れがないか相談に来られる幼児の保護者の多くが、「ことばの遅れ」中でも「発語の遅れ」を訴えられます。2歳になるがまだことばを発しない、3歳になるがまだ単語しか言えない、ことばは出てきたが発音がおかしい、どもっている、など、お子さんのことばの発し方に周りの子どもとの違いを感じるが、どこに相談すればいいかわからず不安に思っている保護者は、とてもたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。

コミュニケーション手段の一つである「ことば」、特に発語（音声言語）の発達は、小学校入学まで個々のペースで進んでいくものなので、非常に個人差が大きく、発達が早い子もいれば遅い子もいます。ちなみに、日本語の音の種類の種類ほとんどが言えるようになる子どもの割合は、6歳でも90%程度です。サ行ザ行ラ行に関しては、1年生でもうまく言えない子がいるのではないのでしょうか。吃音（どもり）に関しては、幼児期に出始めたものは70%以上が何もしなくても改善するという研究結果も出ています。

発語は、コミュニケーション手段の中で、一番見える（聞こえる）ものであるため、周りの子どもとの発達の違いを一番感じます。しかし、ことばを発するにはことばを理解する能力が必要であり、理解するには周囲のこを感取り認識する力が必要です。その認識を深めるのは日々の生活体験が重要であり、さまざまな体験を通して五感から取り入れられる感覚情報が栄養源となります。また、確実に音を作り出すには、口腔や顔面の運動能力も必要となります。このようなことから、発語は子どもの発達の「氷山の一角」とも言えるでしょう。

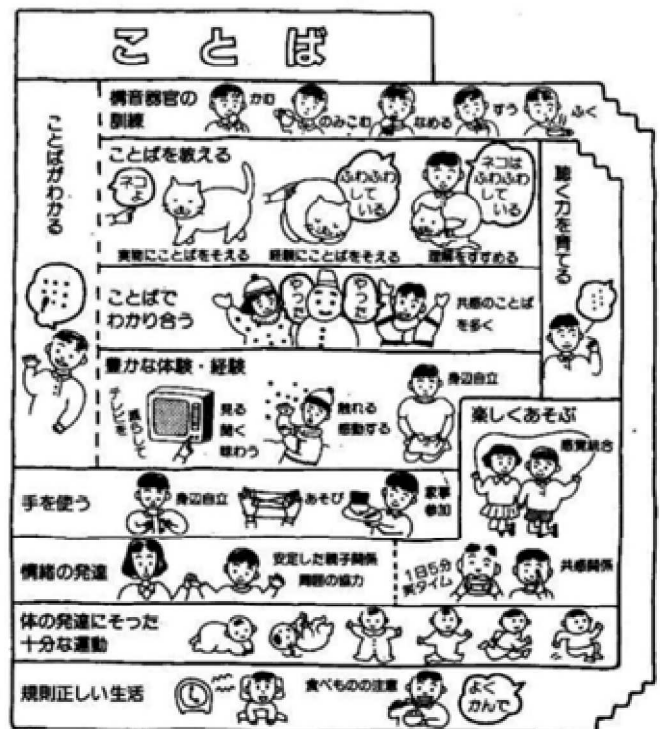
ことばの発達が遅れていると思った時に、まだ言えないことばを「言わせる」ことや、言い間違えたことばを「言い直させる」ことは、子どもにとっては非常に辛い体験となり、ことばへの抵抗を深めていく原因にもなります。子どもがその時にできる意思表示の方法が、指差しや身振り手振りであり、たとえ音声言語として完璧に成り立っていなくても、まずは伝えたい気持ちを汲み取ることが第一です。そして汲み取るために必要なのは日々の生活の中での「共感」です。

わが子のことばの発達が遅いかな、と思った時は、発していることばのみに目を向けるのではなく、わかることばがどれだけあるのか、周りの状況を理解しているのか、何に興味を持っているのか、身の回りの物の扱いができていのかどうかなど、いろいろな角度からお子さんのできているところを見つけていけると良いと思います。関わり方がわからなかったり不安だったりする時は、気軽に相談機関に相談することをお勧めします。

<参考文献>

発達障害とことばの相談／中川信子 小学館
子どもとことば／岡本夏木 岩波新書

NPO法人こころ・コミュニケーションの発達支援
まいすてっぷより発信
cocomy.jpで検索



問合せ先 福祉課福祉政策係 ☎@1111 (内線2809)

『ことばのビル』（「ことばをはぐくむ」中川信子/ぶどう社 より）